老いの散策『学ぶ脳』 への道

②大腸ガン「手術」のひと夜

手術が終ったのだ

また

呼びごえが……

伊 藤 眞 作

妻も

息子も

不安げに 入って来た

オズオズ と

くくりつけられると

マスイが始まった

ベッドに

とてつもなく 明るかった

看護師さんたちは

「いいんだよ 終ったんだから」

けげんそうに

のぞき込む 「もう どこも痛くないんだから……」

また が

呼ばれた

返せなかった

返事をした

僕の名が

呼ばれた

やっと バイバイ 納得してくれた ばいばい

老いの散歩

25

ねむったのか くらい寝室

言葉さえ 出て来ない イタイ イタイ

なにも見えぬが しかし まぎれもなく激痛だ

腸ゼンブが

モウレツに イタイ イタイ

イタミだけが まっくらな なかに ひとり占めしている

手足は リキめば しばられ

ズレ

カスカに

でも

気なぐさめでしかない

イタイ イタイ

そんなの ドウダッテイイ 痛いほど 治りが早い」とか ドウダッテイイ

> ひまなく襲う イタミ このイタミ 早ク ドウニカしてくれ

イタイ イタイ

かぞくも もう

ねてるだろう

イタイ イタイ

くやまれて ならなかった 手術をやったのが

失敗した…… コリャ 寝れないゾ

モガクガ せめて キモチだけでも

くくりつけられたが

ダメナモノハ ダメナノダ

せめて まつ暗ヤミ メ

26

いま 夜アケに クに チカイのか 何時カグライ よ オシエ \vdash オイのか 口

イツマデ 今日ナノカ アスなのか

続ケサセル気カ

ムダな格闘ヲ

モガキツカレテ いつしか

そのトタン

色の 脳裏をよぎる ひとむらが

観ると

相あらそい続ける

色彩のかたまり ほぐれつ

> 「インディアン・レッドの地ジャクソン・ポロックの かたわらに佇んだことがあった これこそ かって よみがえりだったのだ

 $\overline{\mathcal{O}}$ 壁

いつしか 拡大鏡になり変り 痛みは

力学により 「画布」が織りなす

追いつ 追われつ 隠れたり

もはや 画面 ちからの「化身」となり変り 内から湧き上がりくる の 痛みは

となって 部分 部分 大写しされる

とわに続くなかのいくつかの群れ 相手をおびやかし狙う

ひとコマなのだ

彩やかさに

耽りはじめてさえいた

観ても 考えても

しかし

いくら

言葉にはならないいつまで、経ってな 経っても

なるべき

満ち満ちて ひかえているが

様々な要素に

言葉以前の姿でいつまでたっても ひかえたまゝだ

たたずんでいる

そのチ ヤ、 ン、ス、 求 8 0 0

早すぎた 画家 付けられた「画 ポ 口 早世 ツ ク 題」はいために \mathcal{O}

詩人だった友の 手になるものと判明した

のだ

ここまで知られた以上 「インディアン・ レ ・ツド · の 地

の壁画

という「画題」 を

抹殺せよ

そして あらたに

「対話の世界」を 画布」と「あなた」との

つむぎ出そうではな

1

カン

足音が 夜があけたらし 近づいて来た

もはや

ジャクソン・

ポ

口

ックは

俺 このものになったの だ

!

あとで

28